「いわての復興教育推進事業(交流学習スクール)」成果報告書

学校名:岩手県立久慈東高等学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

本校は全校生徒 517 名の総合学科高校であり、北は洋野町、南は岩泉町まで、管内広域から生徒が通学している。久慈市は東日本大震災、台風 10 号、本年度では 10 月 13 日に通過した台風 19 号が久慈・普代を中心に大きな被害を出し生徒の中でも避難、床上浸水被害を受けた生徒がおり、常に災害時を想定して学校生活を送ることを意識しなければならない地域である。今年度も防災・復興について学びを深めるとともに、交流を通して地域の良さに気づかせ、岩手県の復興の現状を理解し、復興の担い手としての自身の在り方について考えを深めることを目的とし、交流学習スクールに臨んだ。

Ⅱ 取組の概要

1 〈第1回交流会 R1.6.5 於:久慈東高校〉

一戸高校を久慈東高校に招き、グループワークを通して、お互いを知り合う活動を行った。久慈東の各系列の特色や、これまで取り組んできた復興支援等を紹介した。今年度久慈東で、『笑顔は元気の源』をテーマに、子供からお年寄りまで行えるレクリエーション活動として考えた「ボッチャ久慈東 version」を紹介し、一緒に用具の作成、レクを体験した。

必要物品は、新聞紙とガムテープのみと特別な道具は必要がない。足腰が弱い方は車いすに座って、手が不自由な方は足でボールを転がしてなど競技が人を選ばないようにルールを工夫した。

活動を通して生きがいづくりを支援することが復 興支援につながっていることを確認した。



一戸高校は、系列の特色を生かしたハンドマッサー ジを行い、自分たちの普段の学習が復興支援にもつな がっていることを理解した。



2 〈第 2 回交流会 R1.6.25 於:一戸高校〉

一戸高校に久慈東が招かれ、復元納棺師 笹原留 似子先生の講演「いのち輝かせ〜復元納棺師の現場 から〜」を聴講した。

また、一戸高校がこれまで野田村で行ってきた復 興支援について理解を深めた。



3 〈東高祭 R1.10.19~20 於: 久慈東高校〉

久慈東高校文化祭で、これまでの交流スクールで の学習をまとめた模造紙を展示し、保護者や地域住 民に取り組みの様子を発信した。

また、ハンドマッサージとセラピューテックケア のブースを設け、来校者に取り組みを発表した。



4 〈野田村総合文化祭 R1.11.2 於: 久慈東高校〉 一戸高校が毎年行っている野田村総合文化祭に久 慈東高校も参加した。地域の理解を深めることがで きたと共に様々な支援方法があることを学んだ。



5 〈第4回交流会 R1.12.17 於:一戸高校〉 一戸高校3年生が介護実習で実践した介護過程を 聴講した。居宅介護現場における個別対応と介護過程の意義について学ぶことにより、今後目指すべき 介護の姿と復興支援について考えを深めた。



Ⅲ 取組の成果と課題

生徒の感想文より

1 ・子供から高齢者の方や体の不自由な方でも一 緒にレクリエーションを行えるように競技 の方法を考えることができた。避難所等の限 られた場所でもできると思う。

- ・簡単なルールなので誰でも楽しむことができ、 ストレス発散や復興支援につながると思った。
- ・初めて会った一戸高校の人ともレクリエーションを通じて交流しやすくなった。
- いろいろな復興サポートの仕方があるのだと 感じた。
- 2 ・悲しいことがあった時には寄り添い、亡くなった後も思い続けることが大切だということを学んだ。
 - ・感情の表現を促すことが、遺族が悲しみを乗り越え、新しい1歩を踏み出す力につながることを教わった。東日本大震災の時の話もあり、心のケアも復興支援の一つだと思った。
 - 介護をする時、その人の生きた歴史を大切に することを意識したいと思った。
- 3 ・たくさんの方とコミュニケーションを取れた。
 - 初めて会った人なのに、マッサージをしている時間たくさんの話をすることができて楽しかった。
- 4 ・マッサージ後に、「ありがとう。体が楽になった。」と言われ、嬉しさと達成感があった。
 - ・久慈東とは違うマッサージの方法を一戸高校の生徒から教えてもらえた。
 - ・地域の方々に「気持ち良い」「落ち着く」「疲れが取れた」などの言葉をかけてもらい、やってよかったなという気持ちになった。
 - ・小さな活動でも復興につながるのだと感じた。
- 5 ・来年度の介護実習では、自分たちも介護過程 の実践をしてみたいと思った。
 - ・その人が何をしたいのか、何を望んでいるのか、それを見つけ目標に取り入れて行くことで、活動に対する意欲向上につながると思った。

1年間の交流を通して、いろいろな支援の方法があることを感じた。物理的な支援ばかりでなく、心のケアも復興支援につながるということを多く感じた生徒が多かったようだ。しかし、今年度は、昨年まで取り組んできた田老交流を行うことができなかった。移動距離や移動時間など検討して、再度交流を行い継続的な支援にしていきたい。

今後は、学びを地域に発信していける場を増やして いく必要がある。

地域防災や今後の岩手の復興・発展に関わる人材育成のために、本事業での学びを一時的なものでなく継続していけるように指導していきたい。